



一般社団法人 日本庭園協会

東京都新宿区西早稻田1-6-3 フェリオ西早稻田301号

〒169-0051 TEL:03-3204-0595 (FAX兼用)

E-mail:gsj20@m7.dion.ne.jp URL:<http://nitteikyou.org/>

発行者:会長 高橋康夫

編集者:広報委員長 小沼康子

題字:上原敬二

発行日:2022(令和4)年1月1日



栗林公園 南湖に浮かぶ仙磯 2021.10.31 筆者撮影

## 温故知新



1946年、香川県生まれ。香川県立栗林公園勤務を経て、専門家として活動する。日本庭園協会香川県(現四国)支部長、文化財庭園保存技術者協議会代表を務める。かたわら中国西安市の芸源造景有限公司で技術顧問として活動している。尊敬する人:龍居竹之介先生。先生著『おりおりの庭園論』や多くの講演録が教科書。先生のことば「庭の有様は多様性」から庭の多角的な見方を学んだ。

水本 隆信 (元理事)

龍居竹之介名誉会長に声を掛けられ日本庭園協会に入会して、以後、吉川需、北村信正歴代会長など多くの先生方に指導をいただき、主に古庭園・文化財庭園に係る仕事をして今日に至っている。昔のことなので当たり前だが、作庭当時の資料を探し出すのに苦労する。つくらせた人(施主)、つくった人(庭師)はこの世にすでになく、現存する庭園はともかく、形は残っているが荒れた庭や遺跡となつた庭園など古いほど難しいことだらけである。

2002(平成14)年に設立された「文化財庭園保存技術者協議会」に所属する技術者として、文化庁や文化審議会、専門委員の先生の指導のもと、全国各地で活動している。現地に赴き、どこから手をつければよいか行ってみて初めて分かるものもあれば、今までの知識や経験だけでは読みきれないものもあり、様々な手立ても限界になることがある。確証がない限り手をつけることができず、そこから前に進めると破壊につながる。そのような中で作者の想い・感性の素晴らしさが、庭にじみ出ていることを発見した時は感動する。

このような経験の中で、重森三玲氏の業績が何度も参考になった。氏は昭和初期から戦前にかけて、全国各地の古庭園の調査・測量を行い、その研究成果を『日本庭園史大系』にまとめた。氏は、文化財庭園について正しく鑑賞し、それを自分のものにすることができる、それを基礎に創作し、自然を基本に抽象化することによって永遠に生き延びることができる、それを確に創り、次の世代の人々に役立てるべきと説いている。『永遠のモダン』といわれる所以である。

近年、中国での仕事が増え、合間に唐時代につくられた西安市大明宮内の「蓬萊山」を確認しに行つた。その時、不思議な「縁」を感じた。数年前より整備に携わっている愛媛県大洲市の「臥龍山荘庭園(令和3年国指定名勝)」にも肱川の流れの中に「蓬萊島」がある。二千年前の想いがここにある。それが日本に伝わって多くの庭の中に今もつくりれているのだ。我々の仕事は二千年前から受け継がれている。やはり庭は歴史を証明する文化財と言える。

設立100年を経た日本庭園協会の歴史は、明治以降の近代日本の庭園史と同時代を歩んで、大きな足跡を残してきた。今、多くの造園家が海外で活躍している。次の世代の方々は更に海外に向けて発信し、庭園文化の発展と啓蒙に繋げていくことがますます求められる。

日常を取り戻す 庭を見に行こう！

今年こそは皆様にお会いしたい



会長  
高橋 康夫

A portrait of Shigeo Taki, an elderly man with glasses and a white shirt, looking slightly to the right. He is wearing a dark suit and tie.

会員の皆様が無事に新年をお迎え  
できたことと心よりお喜び申し上げ  
ます。

一昨年の1月16日、日本で最初の  
新型コロナウイルス感染者第1号が  
確認されて以来のコロナ禍の中、「会  
員一人でもコロナに罹らない」とい  
う大命題の下、総会をはじめ各事業  
を縮小もしくは中止をして、非常事  
態を乗り切つてまいりました。会員  
の皆様におかれましては、この決断  
に対しご理解を賜りましたこと、  
心より感謝申し上げます。

昨年は、緊急事態宣言が何度も発令され、東京都では7月から8月にかけてデルタ株による感染拡大が急速に高まり、感染者数が1日で5千人を超えるなど、第5波に襲われ、医療逼迫度が危険領域まで達しました。東京オリンピック・パラリン

今年こそは皆様に対面でお会いできることを心より願っております。

ところで、12月初旬に名残の紅葉を求めて京都の庭園巡りをしました。東福寺方丈庭園、金閣寺庭園、銀閣寺庭園などを巡りましたが、市街地を離れた北区西賀茂北鎮守庵町

頃は遠隔地で参加が難しい方、イギリス在住の方も参加していただき、オンライン講座のメリットが確認されました。今年度は、対面講座と両方で開催する方向で進めてまいります。また、様々な会議においても対面とオンラインの両立を目指していきたいと考えております。さらに、龍居竹之介名誉会長のロングラン講演会など新たな事業展開を企画しています。

会員の皆様が無事に新年をお迎え  
できたことと心よりお喜び申し上げ  
ます。

ピックも無観客開催を余儀なくされた事態となりました。しかしながらコロナウイルスのワクチン接種も進み、感染者数が減少したので、9月末で緊急事態宣言も解除となり、10月以降、感染者数は低い数値で落ち着いている状態です。

にある正伝寺庭園が特に心に残りました。敷地は約100坪で白砂の平庭にサツキを主体とした刈込を七五三に配し、比叡山を借景としています。奇をてらうこともなく、芸術性を前面に出すこともなく、シンプルな空間構成なのですが、なぜか心が落ち着いて見入ってしまいました。

卷一

新年明けましておめでとうござ  
ひ  
三  
一。

A portrait of a middle-aged man with dark hair and glasses, wearing a dark turtleneck sweater. He is looking directly at the camera against a plain, light-colored background.

昭和36年生まれ、北海道函館市出身。高校卒業後、家業を継ぎ、昭和61年より代表となり、現在に至る。平成30年より支部長に就任。

## 新年の挨拶 19支部より



デヴィッド・ボウイが愛した正伝寺庭園  
2021.11.30 高橋康夫撮影

てきて います。函館の冬 囲いは冬の  
庭の景色と実用が半々だと私は思つ  
ていますが、最近通りがかりに冬 囲  
いをして いるお宅を見ていると、何  
のために冬 囲いをして いるのか理解  
に苦しむようなお庭が見られます。  
樹木にかけた雪吊りの繩は緩み、数

新型コロナが収まりつつある状況で、このまま収束してくれるとよいのですが、今の時期、函館では冬の入り口で冬囲いの作業に勤しんでいます。私が仕事を始めたころは、冬囲いをするお宅がたくさんあり、最後のあたりは雪の中での作業になります。寒さで手がかじかんだ記憶があります。今は温暖化の影響か雪を掘ることはありません。今は温ぬく、楽になります。青竹、繩、筵、藁も入手が困難となつた。冬囲いをするお宅も年々減少し、数えるだけとなり、使う資材の

本申し訳程度にかかるのみで藁ボツチはみすぼらしく実用とも景色ともつかない有様で、なんとも寂しい限りです。私自身もそう綺麗な冬囲いをしているとも思いませんが、毎日試行錯誤しながら仕事に励んでおります。また、雪吊りに関して雪の降る地方とそうでない地方の違いなんか、写真等で見ますとよく樹木（主に松ですが）の輪郭の外側に縄を張り巡らしているのを見かけます。確かに均等にたくさんの縄が張り巡らされた姿は綺麗ですが、雪吊りの趣旨からすると何とも奇妙な違和感を感じます。



「旧岩船氏庭園（香雪園）」（国指定名勝）の雪吊り  
2021.11.28 桃井雅彦撮影

ます。また、雪吊りに関しても雪の降る地方とそうでない地方の違いなんか、写真等で見ますとよく樹木（主に松ですが）の輪郭の外側に縄を張り巡らしているのを見かけます。確かに均等にたくさんの縄が張り巡らされた姿は綺麗ですが、雪吊りの趣旨からすると何とも奇妙な違和感を感じます。

当支部は、菊地正樹前支部長はじめ、個性あふれる会員が多くおります。その伝統と創造の精神で完成了東日本大震災復興記念庭園は、5年目を迎えます。地元ボランティアの方たちのご協力もあり、美しい姿で成長を続けています。

この庭園管理が主な支部活動となつておりますが、毎月末にはミニ講座も始めました。ジャンルを問わない授業は大好評です。さらに今年こそ延期となつていた高木枝打ち剪定講習会も状況を見ながら再開したいと考えています。当支部の活動はインスタグラムで見られることができますので、よろしくお願ひいたします。



東日本大震災復興記念庭園（宮城県黒川郡大和町）・寒風の中薄暮の景  
2021.11.2 ササキシゲル氏撮影



明けましておめでとうございます。

昭和48年生まれ、仙台市出身。地元造園会社で修業後、独立。好きな人…福田繁雄

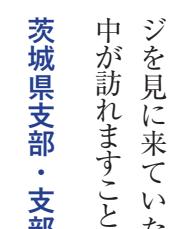
宮城県支部・支部長 **竹田 利光**



明けましておめでとうございます。

平成元年生まれ、栃木県出身。業務歴：【庭園管理】日光田母沢御用邸記念公園、栃木県公館、栃木県中央公園ほか。【文化財庭園保存整備】工事】伝法院庭園（台東区・浅草寺内）ほか

栃木県支部・支部長 **清水 一樹**



明けましておめでとうございます。

昭和22年生まれ、茨城県水戸市出身。京都の造園会社で修業後昭和54年独立。令和2年「現代の名工」。現在（株）植幸取締役会長。

茨城県支部・支部長 **飛田 幸男**

申し上げますとともに、今年こそ気兼ねなく、山いつぱいのゴヨウツツジを見に来ていただけるような世の中が訪れますことを祈念いたします。

中が訪れますことを祈念いたします。私はおぼえます。そんなことを考えるのは私だけでしょうか。新年早々つまらないことを書きました。

最後になりましたが、会員各位のご健康とご活躍をご祈念いたしまして新年のご挨拶といたします。

この庭園管理が主な支部活動となつておりますが、毎月末にはミニ講座も始めました。ジャンルを問わない授業は大好評です。さらに今年こそ延期となつていた高木枝打ち剪定講習会も状況を見ながら再開したいと考えています。当支部の活動はインスタグラムで見られることができますので、よろしくお願ひいたします。

私はおぼえます。そんなことを考えるのは私だけでしょうか。新年早々つまらないことを書きました。

この庭園管理が主な支部活動となつておりますが、毎月末にはミニ講座も始めました。ジャンルを問わない授業は大好評です。さらに今年こそ延期となつていた高木枝打ち剪定講習会も状況を見ながら再開したいと考えています。当支部の活動はインスタグラムで見られることができますので、よろしくお願ひいたします。

この庭園管理が主な支部活動となつておりますが、毎月末にはミニ講座も始めました。ジャンルを問わない授業は大好評です。さらに今年こそ延期となつていた高木枝打ち剪定講習会も状況を見ながら再開したいと考えています。当支部の活動はインスタグラムで見られることができますので、よろしくお願ひいたします。

**埼玉県支部・支部長 山田祐司**

新潟県出身。平成15年  
4月独立。



新年明けましておめでとうござ  
います。

本年もどうぞよろしくお願ひい  
たします。

私が心に思うことは、ものづくりの  
素晴らしさを再確認したいということ  
です。庭をつくる仕事は、土を用  
い、緑や石を使い、水を扱い、何も  
ない空間に景色をつくるという他に  
はない特別な仕事と感じています。

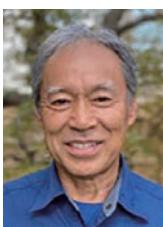
その仕事に従事する私達は、とても  
幸せ者だと思うのです。美しいもの  
や形や景色を生み出すというのは決  
して容易いことではなく、苦しみも  
伴い頭を悩ませることも多々あると  
思います。

しかし、それだけに思いを入れて  
つくった庭というのは、完成した時  
に大きな喜びを与えてくれるのだと  
思うのです。そのようなもののづくり  
の素晴らしさを体感できるよう支部  
活動を充実したものにしていきたい  
です。支部会員が互いに切磋琢磨し  
ながら、新たな庭の可能性を探って  
先生も立派な阿弥でした。その想い

いきたいです。役員一同、しっかりと  
準備をして活動に向かいたいと思  
います。

を千葉県支部会員は引き継ぎ、後世  
に伝えていきたいと思います。

この2年、コロナ禍で全世界の  
人々が生き方も経済も含め翻弄され  
てきました。マイナスの面だけを見  
たら、全人類が同時にこれほどのダ  
メージを受けたことはなかつたと思  
います。でも、慎重に事を運べばそ  
の先に光はあるはずです。



**千葉県支部・支部長 岩崎 隆**  
昭和26年生まれ、千葉  
県市川市出身。機械科  
卒業後、マツダディー  
ラー自動車整備士勤務。  
特技：音楽鑑賞（オーディオマニア）

お庭の好きな全国の皆様、新しい  
年の初めに本年が何事にも良き年に  
なることをお祈り申し上げます。健  
康に新年を迎えたことへの感謝  
と、皆様と共に同じ生業で今日まで  
続けてこられたことに感謝申し上げ  
ます。

当支部では、相談役の三橋一夫氏を  
昨年失い、喪に服す一年になります。

松の手入れをした後の清々しい  
気持ち良さ、莊厳な気品、この情  
景や、この感情を感じることがで  
きる喜び、庭師にしか理解できな  
い感情をお施主様に伝え、お施主  
様と共に高まっていくのが阿弥衆  
としての庭師の役目です。

日本が世界に冠たる国家になれた  
のも阿弥の教えを実行してきたから  
です。阿弥の存在を知つてから、私は  
庭師として自信を持つて生きてこ  
られました。昨年亡くなられた三橋  
先生も立派な阿弥でした。その想い

**神奈川県支部・支部長 米山拓未**

昭和47年生まれ、神奈  
川県横浜市出身。鎌倉  
院の庭から商業施設ま  
でフィールドは広く活  
動。フランスにてセミナー開催に携わる。好きな庭  
施工。東京や横浜の寺  
院の庭から商業施設ま  
でフィールドは広く活  
動。沖縄グスク群

本年もよろしくお願ひ申しあげま  
す。支部では、昨年に引き続き瓦土  
塙講習会を続けていますが、コロナ  
禍の影響で、1年で完成するはずが  
2年掛かってしまいました。感染対  
策を万全にして、緊急事態宣言の発  
令状況を慎重に判断しながら進めて  
おります。また全国からの参加者が  
あり、様々な年代の方々が来てくれ  
て大変うれしいことですが、支部  
としてはなおさら、感染状況を見  
ながら気を引き締めていきたいと  
思います。

本年もよろしくお願ひ申しあげま  
す。支部では、昨年に引き続き瓦土  
塙講習会を続けていますが、コロナ  
禍の影響で、1年で完成するはずが  
2年掛かってしまいました。感染対  
策を万全にして、緊急事態宣言の発  
令状況を慎重に判断しながら進めて  
おります。また全国からの参加者が  
あり、様々な年代の方々が来てくれ  
て大変うれしいことですが、支部  
としてはなおさら、感染状況を見  
ながら気を引き締めていきたいと  
思います。



松原庵の正月飾り・鎌倉  
2021.1月 米山拓未撮影

今現在、小田原總世寺にて支部活動をしており、5年先の構想まで考へて進めているので、今後も期待していて下さい。昨年も数名の入会者がおり、会員数60名を越えました。今後も若い世代が心躍るような活動をして行くのでよろしくお願ひいたします。



### 新潟県支部・会友 戸田由紀江

昭和59年生まれ、新潟県新発田市出身。英香園、遠藤庭園創作所にて修行し、現在は丸山隆光園に勤務。

明けましておめでとうございます。  
昨年2月に支部長を拝命し、コロナ禍でも、どうにかならないかと、もがいていましたが、結局は充電期間となってしまいました。

私は、幼いころから造園の仕事に興味があり、職人に憧れています。  
20歳から造園の仕事を始め、18年になります。周りの方々の優しさ、厳しさ、ご理解がありここまで続けてこられたことを感謝しています。

私の人生で伝統庭園技塾に参加したことは、とても良い経験になりました。貞觀園での修復作業や田中泰阿弥作の庭の測量作業など、普段では経験できないような作業がたくさんありました。最近では、伝統庭園技塾へは、子育てなどでなかなか参加できずにいます。

新しい年を迎え、色々な活動への参加や庭づくり、新しい事への挑戦へは、子育てなどでなかなか参加できずにいます。

戦、これからの自分の姿、自分の造りたい庭の形を考えながら、ずっと緑と触れ合っていきたいです。

### 石川県支部・支部長 宮本広之



### 静岡県支部・支部長 伊久美和秀

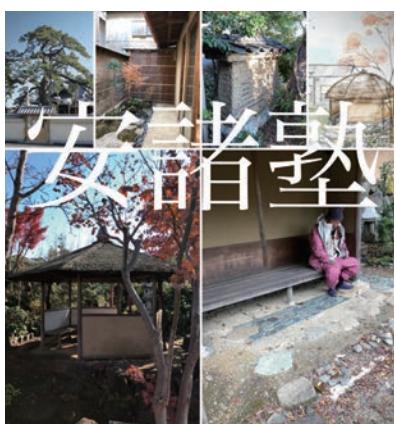
昭和53年生まれ、静岡県藤枝市出身。

新年明けましておめでとうございます。

新支部長としての挨拶と新年の挨拶をいつしょにさせていただきます。

自分はまだまだ未熟者ですが日々修行、勉強し支部長に相応しい人になれる様励んで行きたいと思います。

大好きな庭を創るということに没頭し、どこまで自分が突き詰めることができるのか、どれだけ周りを巻き込み、庭の深みを周りに撒き散らすことができるのか、一つ、自分もかりです。



安諸塾

川の地よりお祈り申し上げます。  
は素晴らしい年になりますよう、石川の地よりお祈り申し上げます。

挑戦するつもりで頑張りたいと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

これから静岡県支部としては、庭師一人一人の技術、知識、活気の向上を目指していきたいと思っています。

が、今年は、コロナ終息で、皆様方に

本年は、コロナ終息で、皆様方に

庭師一人一人の技術、知識、活気の向上を目指していきたいと思っています。そのためには、さまざまな講習会、勉強会を開催し、時には外へ出て良い物を見に行ったり、外の庭師と交流を深め、一般の方や静岡の庭師の庭に対する底上げができるといったらと考えています。

こんなコロナの時代ではあります  
が、今年の春には藤枝市で安諸定男親方を招き『安諸塾』を企画予定しております。その時はどうぞよろしくお願いいたします。

愛知県支部・支部長 高見紀雄

昭和44年生まれ、愛知県刈谷市出身。造園工事趣味..映画鑑賞。



新年明けましておめでとうございます。今年も変わらず支部長を務めさせていただきます。

コロナ禍の2年間、支部活動は自粛。私の心にも変化が起きておりました。中止の繰り返し。トーケンショントリモート

で十分でしょ？とか簡単に言わ  
れ、理解はしているがやはり人とな  
がらないとダメなのだ。ああ、次  
第に気持ちが萎えていくのがわか  
る。庭に対する問題定義にすら関心  
が無くなつてゆく…。



落ち葉アート（名古屋市栄テレビヒロバ） 2021.11.21

新年の挨拶も本来は他の支部会員  
に寄稿のお願いをするところ、結局  
誰にも頼むことすらできませんでし  
た。そんな中、コロナの感染拡大が  
落ち着いた11月、ガーデンアーティ  
ストの柵山直之氏と出会い、名古屋  
のど真ん中でランドアート（落葉  
アート）をパフォーマンスしました。  
愚痴をこぼすと「実行してきた人  
だからこそ悩みだよね」と言われ、

気持ちを少し前に向かさせてくれま  
した。ああ、同志、後輩、先輩方と  
お酒を飲みながら庭づくりやイベン  
トなどの夢を語り、たわいない会話  
の中から新たなアイデアが生まれ、  
行動力となつていたのだな。

さあ、今年はどんな一年になるの  
だろう。  
とりあえず自然体にフラットな視  
線を心がけようと思います。

### 近畿支部・支部長 山田 拓広

昭和39年、京都生まれ。  
庭園の調査設計、保存  
整備等作業を通して  
庭園の奥深い魅力に惹  
き込まれ、現在に至  
る。好きな庭…長年調  
査を行った「桂離宮」



岡山県支部・正会員 柴岡 基  
昭和48年生まれ、岡山  
県岡山市出身。造園  
土木工事、樹木管理に  
従事。



広島県支部・正会員 藤原 忍  
昭和38年生まれ、広島  
県福山市・小島造園勤  
務後、平成16年、作景  
園創業。

広島県支部・正会員 川部 純  
昭和44年生まれ、鳥取  
県倉吉市出身。高校卒  
業後、東京で団体職員  
として働いたのも小口  
庭園グリーンエクステ  
リアへ。その後倉吉へ帰  
り糺余曲折を経て、現在個人で造園業「えんぞ  
う」を営む。好きな風景・背後に山を望む度々に  
人の手の入った田舎の田園風景。好きな有名人..  
OZZY OSBOURNE. JUDAS PRIESTのメンバーた  
ち。尊敬する人物..陽気な酔っ払いのオジサン。

最後になりますが、会員の皆様  
のご健康とご多幸をお祈り申し上  
げます。

最後になりますが、会員の皆様  
の健康とご多幸をお祈り申し上  
げます。

日本の歴史や伝統を大切にする  
心、持続可能な社会の構築に向けた  
SDGsや低炭素社会の実現、激甚  
化する自然災害への対応、グリーン  
インフラ整備などへの意識の高まり  
から、庭園緑化に対する社会的関心  
も高まっています。時代の二一

新型コロナウイルスが流行して2  
年が経とうとしています。この間、  
経済的には厳しい状況の中でも、私  
たちが扱う庭園や緑地、公園などは  
人々が暮らしていくために不可欠な  
要素であることが、改めて認識され  
てきたのではないでしょうか。

日本は歴史や伝統を大切にする  
心、持続可能な社会の構築に向けた  
SDGsや低炭素社会の実現、激甚  
化する自然災害への対応、グリーン  
インフラ整備などへの意識の高まり  
から、庭園緑化に対する社会的関心  
も高まっています。時代の二一

今年度、支部では、一昨年中止と  
した県外庭園見学研修会を開催しま  
す。と言いたいところではあります  
が、県外での活動は、新型コロナウ  
イルス感染症の感染状況により、開  
催の決断が未だできておりません。  
ただ、昨年、県内のみで支部会員に  
よる作庭研修会を行いました。長  
年、造園に携わってこられた方々の  
庭づくりへの思い、お客様への対応  
などの話から、多くのことを学ぶこ  
とができました。このコロナ禍で行  
われた会が、より貴重なものと感じ  
ました。

もう少々、我慢が続くとは思いま  
すが、皆様と講習会等でお会いでき  
ることを心待ちにし、力を身につけ  
ていきたいと思います。

そんな日本人として、世界の平均

あけましておめでとうございます。

残念なことに昨年のCOP26で  
は、日本は温暖化対策に消極的で  
あるという烙印が押されてしまい  
ました。

気温上昇を抑えるために庭園を通してできることが沢山あると思います。

これからは、カーボンニュートラル実現のために、庭をつくるうえで重要な植物を植えることはもちろん、今ある庭を末永く守り育てる工夫や、作庭の過程や材料の見直しも必要になってくるでしょう。

まずは、より良い環境をつくる仕事をする我々が、どの業界にも負けないように、この年を時代の最先端を突き進む年にしていきましょう。

### 島根県支部・支部長 仲佐 修二



昭和52年生まれ、島根県出身。 摂南大学卒業後、地元造園会社に勤める。その後、家業の造園業を継ぐ。一般住宅から旅館の庭、寺院施設、店舗、海外で作庭する。好きな庭・桂離宮、臥龍山荘、たたらの庭。好きな人物・杉本博司、小島佐一。

明けましておめでとうございます。

皆様には、幸多き新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

旧年は世界的な新型コロナウイルスの感染拡大により皆様の生活様式、働き方や仕事のあり方が一層激変した一年ではなかつたでしょうか。

私たち島根県支部においても豆矢

石割り講習会、茅葺講習会を予定しておりましたが、延期せざるを得ない状況となりました。その中で何と

か豆矢を使った石割講習会は実施することができました。古くからの石

割り技術を教わり、習得でき、今後、個々それぞれ活用していけたらと思つております。

2022年度はコロナ対策をしつつ、延期となつています茅葺講習会をはじめ、全国会員の皆様向けの講習会などを計画し、造園業界をどんどん地方から盛り上げていきたいと思つております。



石割講習会の様子

明けましておめでとうございます。

コロナ禍で支部活動も全くしておらず、支部会員の皆様には大変ご迷惑とご心配をお掛けし、誠に申し訳なく思います。

支部設立以来20年支部長を勤めてきました。非力な上に大雑把な性格の私が何とか大役を果たすことができたのは、単に会員の皆様のお陰と心から感謝いたします。

支部長として特に記憶に残るのは、平成26年11月開催の支部・本部共催講座です。「月の桂の庭」はじめ雪舟作と伝わる「常栄寺庭園」などの庭園見学はもちろん長州の「ふく料理」も堪能していただく企画で、全国各地から66名もの参加者を迎えた大変好評でした。

今後も支部の活性化をはかりつて支部会員一人一人がさらなる活躍をして、支部を盛り上げていきたいと考えております。全国の会員の皆様、山口県支部を今までにも増してご支援下さいますようお願いし、新年のご挨拶いたします。

今後の支部活動として、支部会員一人一人が、庭園協会の会員でよかつたと思えるような運営を目指したいと思います。

なお、越智将人氏が、厚生労働大臣より令和3年度現代の名工として表彰されました。心よりお慶び申上げます。

### 四国支部・支部長 米谷 進吾



昭和35年生まれ。三代目の植木屋で寺院、旅館、文化財庭園を中心として管理。好きなこと・巨樹や開花時期に合わせた花木の見て歩き

新しき年を迎えておめでとうございます。

一昨年来、コロナの影響で、支部行事また日頃の業務も思い通りに進めることができにくい状態だった方々も多かつたと思います。

今春から前支部長越智将人氏より新支部長の任を引き継ぎました。平成11年に入会し、早速見学会に参加しました。その帰途の車中で、

当時の支部長水本隆信氏とのエピソードが思い出されます。

新支部長の任を引き継ぎました。その車中で、当時の支部長水本隆信氏とのエピソードが思い出されます。この部分やあそこはどうだった?などと問われ、ほかの先輩諸兄も加わり、あれやこれやの質問の応酬。返答に窮すると「見て無いのかー」。何よりも思わずなかつたのかー」と。表の技術と、その裏にある思想的な思いをしっかりと見抜き、見通す力を鍛えようと教わりました。

今後の支部活動として、支部会員一人一人が、庭園協会の会員でよかつたと思えるような運営を目指したいと思います。

(プロフィール中は敬称略とさせていただきました)

## 第12回 庭園技術連続基礎講座

### 第一回 『煎茶精神と庭～そのかかわりをさぐる～』

加藤  
精一

2021（令和3）年10月31日（日）

2021年度「庭園技術連続基礎講座」は、コロナ禍にあってはじめてオンライン形式で開催された。

第1回目は、10月31日（日）に加藤精一講師により『煎茶精神と庭』と題して開催され、日本各地および遠くロンドンからの参加もあり、15名が視聴した。講座終了後は活発な質疑が行われ、講座開催の新たな可能性が見えてきた。

今号では、講座内容の紹介と受講生の感想を掲載する。

立礼席とは、机と椅子を使って行われる茶道点前の一つの形態である。図1はホテルの一室での席だが、屋外の景色の良い所で野点席（図2）が設けられることがある。

煎茶とは、茶葉を急須に入れ、小さな茶碗につぎ分け、茶卓にのせ、客に味わつてもらうもので、通常、二煎程出す。

煎茶では、季節感やその場の雰囲気に合わせ、各道具の様々な取り合せをして、その時々の一服一煎を楽しむ。茶の量が大変少ないと、菓子は二煎目の前に干菓子などを出す。

この他、文人趣味をあらわすため、硯、墨、筆などの文房具や花卉在に至る。平成21年、日本庭園協会に入会。現在常務理事・総務委員長。



【加藤精一プロフィール】

昭和37年生まれ、埼玉県出身。5歳から高校卒業まで宮城県在住。

多摩美術大学（油絵専攻）に進学。卒業後、印刷関係の会社で営業職。28歳でマーケティング会社等に転職。35歳で植木職の修行。39歳で独立し、43歳で法人化。平成30年、加藤庭園研究事務所設立、現

煎茶は一般に文人墨客が好むものと言われているが、実際それがどのようなものなのかをさぐっていく。

煎茶について、私が所属する「専心小笠原流」の立礼席のしつらえ（図1）を例に説明する。

立礼席とは、机と椅子を使って行われる茶道点前の一つの形態である。図1はホテルの一室での席だが、屋外の景色の良い所で野点席（図2）が設けられることがある。

煎茶とは、茶葉を急須に入れ、小さな茶碗につぎ分け、茶卓にのせ、客に味わつてもらうもので、通常、二煎程出す。

煎茶では、季節感やその場の雰囲気に合わせ、各道具の様々な取り合せをして、その時々の一服一煎を楽しむ。茶の量が大変少ないと、菓子は二煎目の前に干菓子などを出す。

この他、文人趣味をあらわすため、硯、墨、筆などの文房具や花卉

#### はじめに

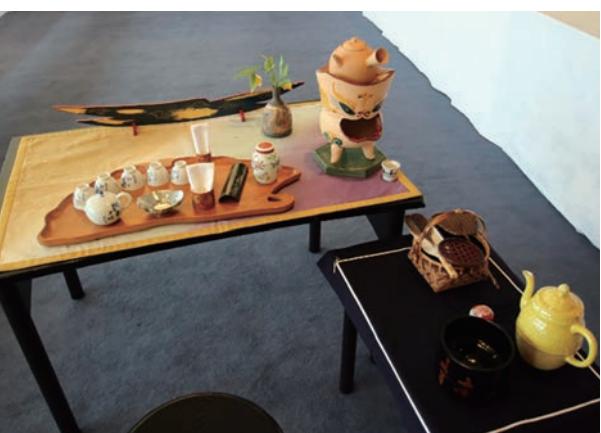


図1 立礼席のしつらえ（専心小笠原流・沖縄県支部・全国研修会）

#### 中国唐代の煎茶誕生

古代中国の神話に伝説の帝王・神農が茶の葉を葉として服したという話が残っている。文献上では、紀元前の大漢時代に、茶が取引されていました記録が残されているが、その頃も茶のように扱われていた。

陸羽の煎茶精神形成に大きな影響を与えたのが、詩僧の皎然（生没年不詳）、書家の顔真卿（709～805）で、陸羽とともに「茶道三友」と呼ばれている。

陸羽の煎茶精神形成に大きな影響を与えたのが、詩僧の皎然（生没年不詳）、書家の顔真卿（709～805）で、陸羽とともに「茶道三友」と呼ばれている。

皎然は杭州の名刹雲隱寺で受戒し、天台、華嚴の両宗を納め、後に



図2 野点席（東京大茶会・浜離宮恩賜庭園）2018.10.21

禪僧に転じた。茶に詳しく、『茶決』と題する茶書を著している。その生涯は、「ただ陶と謝に将いて、終日情を忘るべし、多く相い識るを欲せず、人に逢いて名を道うに懶し」という日々だった。このことは、煎茶精神の原風景ともいえる世界の形成に、大きな位置を占めていた。陸羽や皎然の煎茶は、世俗の茶から遠く隔たつた隠逸・文雅の道につながるものがあった。

顔真卿は生涯、唐朝への忠誠を貫いた。学問・教養・人格において人並秀でたその存在は、ひたすら唐王朝の権威回復に傾注された。しかしそのままにも高い理想主義は、現実的な政治家の受け入れ難いところであり、忠臣で功績がありながら、何度も中央政界から追い出されていった。政界の浄化、綱紀の肅正に努める彼は、凡俗の政治家には煙たい存在であつた。



春木南溟筆 陸羽像（部分）天保12年

州勅使として赴任した4度目の左遷のときであつた。顔真卿は、その時、陸羽のために茶亭「三癸亭」をつくつて支援した。

この茶亭は、殿中侍御史の袁高が湖州を巡検に訪れる機に設けられたもので、史料に見る中では、歴史上初めての茶亭と言われている。袁高は、徳のある役人であつたため、茶道三友の特別のはからいで三癸亭を設けたと考えられる。

唐代の煎茶を語るなかで欠かすことのできないもう一人の人物に詩人の玉川子盧全（795？～835）が挙げられる。盧全は、陸羽の「文雅」や「王朝の趣」の煎茶世界に一層の社会性、政治性を深めていった人物で、その果たした役割は大きなものだつた。

盧全は、陸羽の『茶經』に匹敵する「煎茶歌」を詩作している。それらは、唐代以降の千年にわたって、中国詩人による数多い茶詩のなかでも古今の絶唱と称されている。また、後世の喫茶詩で、盧全の茶詩を踏まないものはないとも言われる。

最も有名な『七椀茶

顔真卿が陸羽と出会つたのは、湖

歌』では次のように詠んでいる。

一椀喉吻潤い。二両椀弧闊を

破る。三椀鼓腸を搜るに、唯文字五

千卷あるのみ。四椀輕汗発し、平生

不平の事、尽く毛孔に向かつて散す。五椀肌骨清く。六椀仙靈に通ず。七椀にして喫茶するを得ず、唯覺ゆ

両腋に習習として清風の生ずるを。

椀数を重ねるごとに高まる茶の効用と、茶の境地を見事に詠い上げている。詩中の「清風」の文字は、煎茶精神を象徴するものとして定着している。このことから、わが国近世の「煎茶」誕生のうえで、その精神の源流に位置するきわめて重要な人物であると言える。

わが国の喫茶風習の始まり

わが国に中国唐代の「煎茶」が伝來したのは平安時代である。先進国唐王朝の強い影響を受けて築かれた王城の地京都と深い繋がりを持つて誕生する。はじめは唐の喫茶風習をそのままねたものと言われている。唐王朝や詩人の間に広がっていた陸羽や盧全の茶、いわゆる「盧陸の道」、「盧陸の遺風」である風雅で老荘的（註3）な煎茶は、永忠など遣唐僧や遣唐使たちが持ち帰つたことでわが国に伝わった。

永忠（743～816）は770

年代に入唐し、30年もの間、唐に滞在した。805年（延暦24年）に最

澄とともに帰朝するまでの間、中国

各地を広く歩き、多くの詩僧、文人

と交流し、唐代の文雅な茶を留学僧の誰よりも多く体験した。空海とも

交流があり、ともに中国での喫茶情報についても確かなものを身に着けていたと思われる。

永忠の留学中は、陸羽が茶亭「三癸亭」で熱心に茶人として活動していた時期と重なつていて。そのころの唐で一般に飲まれていたのは「团茶」と呼ばれるもので、粉にひいた茶を団子のよう固め、飲むときに改めて粉にひき、湯に投じて飲むものであったが、団茶は味覚的にはさしてすぐれていなかつたらしい。

文献上もつとも古い「煎茶」の文

字は、『日本後記』、嵯峨天皇の唐崎行幸のくだりにある。815（弘仁4年）4月22日の条に、琵琶湖で舟遊びをしたのち、滋賀県梵釈寺に立ち寄った天皇に、「大僧都永忠、

手自から茶を煎て御し奉る」という内容で、わが国の喫茶史上、茶に関する記述の初見とされる。

「茶会」についてはそれより前の記述がある。嵯峨天皇の初代

藏人頭藤原冬嗣(775～827)  
の邸宅「閑院」で、814(弘仁5)年4月28日、茶会が催された記録がある。「甚だ雅致有り。天皇翰を染め、群臣詩を献す。時人以つて佳会と為す」とあり、「佳会」は、まさに茶会、茶宴を指すものである。

天皇は、閑院の池泉回遊式庭園の素晴らしい景観を詠い、さらに、「詩を吟じ厭わず香茗を衝き、興に乘じて偏に雅彈を聴くに宜し、暫し清泉に対して煩慮を滌い、況んや寂莫の日に歎を成すをや」と作詩している。

「香茗」の「茗」は茶のことで、「香茗を衝き」の表現から陸羽の『茶經』で詳しい「團茶」を指すと思われる。それを「葉室(堂)」と呼ばれる空間で喫していた。まさしく唐代の陸羽や顏真卿等が楽しんでいた「煎茶」と言える。

最澄や空海らの帰朝後、比較的短い期間に立派な喫茶の宴が開かれるまでになっていたことがわかる。こうしてわが国でも「煎茶」は王朝の雅としての地位が固まつていった。

その後、遣唐使は廃止され、国風文化の隆盛、さらには貴族社会の衰退という時の流れの中で、この異国趣味は次第に忘れ去られた。

しばらく沈滯した喫茶の歴史に一石を投じたのが、榮西禪師(1114

1～1215)の『喫茶養生記』である。悲劇の將軍源実朝が酒におぼれ、二日酔いに苦しむことが多かつたとき、榮西は「茶は養生の仙薬」として『喫茶養生記』を添え、茶を献上した。榮西の茶は宗風の新しい飲み方で、今日の「抹茶」とほとんど変わることがなかつた。

この献茶の実効が高かつたことから、新興武士の新しい宗教禪の普及とともに抹茶の飲用は、武士層にひろまり公家層、富裕な町民層へと普及し盛んになつた。

足利義政が銀閣を建ててから行つた、抹茶を中心とした数寄の茶の湯や鬪茶趣味は、支配層に展開していった。一方、中国では抹茶が影をひそめ、茶葉の使用がそれにとって代わろうとしていた。

明を興した朱元璋(1328～98)が初代皇帝洪武帝となつてから、労力削減のため、貢納茶をつんだ芽のまま進貢するように改めたためと言われる。中国の「喫茶」が、粉茶から茶葉使用への転換、茶筅での搅拌から茶瓶(急須)使用へと変革が起こつた。

わが国の喫茶史は、遣唐僧が伝え以来、常に中国の喫茶法の変革に伴い、その内容を変えてきた。ところが、中国明代の抹茶から茶葉、茶

筅から茶瓶という喫茶法の移行は、わが国では、17世紀初めの隱元隆琦の渡来までおよそ260年余りも遅れた。

その理由の一つとして、茶の湯に

執心の強かつた織田信長や豊臣秀吉といった権力者の存在が、大きく影響したと考えられる。しかし、茶の湯への嗜好が比較的少なかつた徳川家康が天下を統一すると、様相が一変した。豊臣家臣に優れた茶の湯者が多かつたことも意識していたのか、豊臣方一掃の時代背景と長く封印されていた煎茶の容認があつたのかもしれない。

茶葉を用いた、いわゆる煎茶は、いつごろ日本に伝わつたのか、明確な結論がでていないが、鎌倉時代末期から室町時代にかけて五山の禪僧が残した「五山文学」の詩文中に煎茶や煎茶器の使用が見出されている。

推測の域を出ないが、秀吉の印象が深く刻まれた茶の湯の世界から、徳川家恩顧の石川丈山(1583～1672)に新しい茶の世界を託したものかもしれない。

1641(寛永18)年、丈山が59歳の時に造営された詩仙堂は、中国三十六詩仙の肖像を掲げた「詩仙の間」をはじめ、建物や庭園の空間意匠は煎茶的と捉えられている。利休

とは異なる喫茶空間の美意識を、中の詩人や五山禪僧から示唆を得て養つていたとみられる。

### 煎茶の台頭

茶瓶を用いて茶葉を使用する、い

わゆる煎茶、この台頭のきっかけをもたらしたのは、渡来僧、黄檗宗の隱元隆琦(1592～1673)であつた。隱元招来が定説化され、それが広まるのは、やはり武家・茶の湯、公家・煎茶の構図がより重視される時代背景のもとであつた点に、注目したい。

反幕の意識が強く、陰に陽に徳川家の圧力に抗して後水尾院が、深く隱元に帰依した。その文雅な喫茶文化がわが国王朝の雅と一体化する中で隱元招来说が不動のもとなつた。

隱元は帰國断念の事態となつた1660(万治3)年、四代將軍家綱から山城国宇治に寺地を与えられ、翌年黄檗山万福寺を建立し、異彩を放つことになる。

隱元が招來したものは、禪風の革新のみに終わらず、明朝文人風の学芸、文人趣味の招来であり、中国趣味のさらなる展開となつた。同行の黄檗僧の多くも詩文、書画を能くし、新しい禪としての黄檗宗が迎え

入れられた。彼ら黄檗宗の行動の

先々には、芸文的、知的刺激が満ち、

当時台頭しはじめた文人たちを魅了

してやまなかつた。

幕藩体制で閉塞していく中、外の

世界への強い憧れを抱く江戸時代初期の学者や、芸文に関する者にとつて、黄檗宗はもつとも斬新で感動的な内容に富んでいた。文学、史学、

美術、医術、建築、築庭、音楽、印刷など広域な領域にわたつて時代を

切り開く、魅惑的な文化の淵藪の地

として、燐然たる輝きを放つていた。

豊臣家臣団と茶の湯との親密な関

係から、新しい茶への関心を抱いた

と思われる家康、秀忠の思惑に加え、丈山の働きもあり、武家関係者も熱心に煎茶を学ぶという動きもあつた。

しかし、隱元と後水尾院の親密な関係により結果としては、「煎茶」は武家社会よりも公家社会により深く浸透していく。

王朝を重んじる隱元をはじめとする黄檗僧の文雅な茶は、後水尾院周辺の文人貴族や文人僧の世界に天皇を中心とする平安時代の理想社会を回想させ、王朝の権威を追想させる媒介としての力を担つていた。そして、平安時代に用いられていた「煎茶」の文字が意識的に選択され復活

していった。

### 煎茶精神の確立

高遊外壳茶翁（こうゆうがいばいさおう）（1675～1763）は、「煎茶」に精神性、文化的背景を与える、単に飲むという行為だけにとどまらず、煎茶そのものに意識的にとり組み、具体的な煎茶の世界を築き上げた人物である。

肥前佐賀蓮池に生まれ、11歳で蓮池の僧となり、後に龍津寺の化霖道龍により得度し、月海元昭と称した。若い頃からひとり修行の旅をつづけ、ある時、長崎逗留中の清人に煎茶法を学び、60歳頃から京の東山に通仙亭を構えて、いわゆる「壳茶」の生活に入った。煎茶による壳茶翁となり、さらには、僧を離脱し高遊外を名乗つた。

壳茶翁が煎茶での一服一錢を始めたところ、東福寺の禪僧と思われる者が、僧侶は伽藍に住まいするか、あるいは独り托鉢し、「十万の供養を受け」、もし受けられないときは「乞食してでも自活すべき」で、これは「大聖の遺戒（徳の最も高い聖人が後人に遺した訓戒）」だと非難した。

それに対し、壳茶翁は、『対客言志』で、施す人、施される人、施された物のそれぞれにこだわりがあつてはならず、そのすべてが空である

という仏陀の教え「三輪空寂」を説いた。

壳茶翁が京の町で煎茶を売り歩いていたのは、三十三間堂、方広寺（大仏殿）、吉田神社、下鴨神社、仁和寺、日向大神宮、聖護院などで、その多くが「山林の面白き所、水石の清き所」であった。

いずれの場所も、王城の地を舞台に繰り広げられた公武の歴史が刻まれており、反幕的姿勢を隠さなかつた後水尾院の影があり、王朝文化の榮華の名残を留め、天皇家そのものと深い縁で繋がっている。

これらの場所は、江戸幕府の関係者にとって、天皇および公家社会との関わりで、きわめて神経の尖る場所であった。平安王朝の「煎茶」への思慕、それは喫茶史の上での「王政復古」と思われる。尊王論の先駆者の役割を壳茶翁から見て取れる。

壳茶翁は町人や武士などどのよう立場のものにも、茶をまじえて穏やかにその精神を話したと言われている。このような文人たちを中心にして「煎茶」は隆盛となり、もう一つの茶道としての地位を固めていった。

煎茶精神に強く刻印されていた「勤皇」「尊王」そして「王政復古」といった意志を伴つた煎茶の台頭は、近世の初頭に確實な声となつていつた。

### 近世日本の文人煎茶

江戸後期、寛政のころから幕末にかけて、文人煎茶は最盛期を迎えた。

陶芸の世界で秀でた煎茶器をつくり、京焼の新しい時代を切り開いた青木木米（1767～1833）や、詩・書・画三位一体の世界で煎茶を主題に多くの傑作を残した田能村竹田（1777～1835）が現れた。

竹田は蔵を改造した煎茶席を作成し、中国文人風の瀟洒な書斎や三位一体になつた庭園を築くなど、今日に残る新しい煎茶の空間にも力を注いでおり、反幕的姿勢を隠さなかつた後水尾院の影があり、王朝文化の榮華の名残を留め、天皇家そのものと深い縁で繋がっている。

このような文人墨客によつて、ますます煎茶精神が隆盛となつた。近代日本誕生の大きな役割を担つた幕末の志士たちの中にも煎茶愛好家は少なくなかった。

志士達の心に、激しい正義の血をたぎらせた『日本外史』や『日本政記』の歴史書を書いた賴山陽（1780～1832）、幕政批判の直接行動を起こした儒学者の大塙中斎（1793～1837）や藤本鉄石（1816～63）は、いずれも盧全の理想の世界実現のため、明治維新という時代の変革に立ち向かつていた真摯な者達であった。

煎茶精神に強く刻印されていた「勤皇」「尊王」そして「王政復古」といった意志を伴つた煎茶の台頭は、近世の初頭に確實な声となつていつた。

唐物趣味とともに、煎茶には文人精神と社会批判が伴う。これは中国の茶の歴史がもともと培つたものであつた。

以上のように、中国明代に始まつた新しい茶葉とその飲み方の「煎茶」は、売茶翁を中興の祖とし、田能村竹田や国文学者の上田秋成（1734～1809）、ら近世の文人達の手によつて大成された。

文化・文政期以降、花月菴鶴翁（1782～1849）、小川可進（1786～1856）などの煎茶家が誕生した。煎茶の世界での家元制の端緒が開かれ、明治・大正期になつて、新たに煎茶道としての動きが活発になると、小川流や花月菴流の流れを汲み、次々に煎茶の家元が誕生していった。

### 明治期の煎茶隆盛

伊藤博文、木戸孝允、山縣有朋などは、頼山陽、田能村竹田などの強い影響下にあつて煎茶を愛していた。彼らをはじめ多くの幕末の志士達が明治の政財界の中心となつたことで、一時期煎茶隆盛の時代が訪れた。

しかし、明治の世になり、廢藩置県によつて全国の藩から流れ出た茶の湯の品々は古物商たちの絶好の商いとなつた。それらの海外流失を防ぐことやその価値の損失を防ぐために明治の実業家たちが買いおさえ、茶の湯が再び大きな流行となつた。その後、日清戦争などの影響によつて、中国文人趣味である煎茶趣味は、下火になつて行つた。

太平洋戦争の後、わずかながら、煎茶趣味の流行はあつたようだが、茶道と言えば、お抹茶の茶の湯という時代になつていつた。

煎茶の隆盛を担つていた喫茶趣味の中心であつた実業家などの趣味人は、戦後の再興のための仕事に邁進し、茶の湯、煎茶趣味どころではなくなつたと思われる。

そうした時代の変化は庭にも影響し、明治以降が分岐点となり、荒廃、消失し、使われなくなつたものが多数あつた。大きく力のある層が激変し、それまでの庭は維持できなくなつてしまつたことは残念極まりない。

### 煎茶と庭のかかわり

814（弘仁5）年、藤原冬嗣の閑院で喫茶の宴が開かれた時の情景を詠んだ詩によると、庭には池がつくられ、釣魚の場所や小舟が用意されており、太公望のように悠然と釣りを楽しむことができた。また池の周りには柳、松などが植えられていた。

### 玉川庭図

籬島軒秋里の『築山庭造伝後編』1828（文政11年）に、「玉川庭図（図3）」が掲載されている。

ここに描かれているのは、遠く連山を望む雄大な空間構成を背景に、

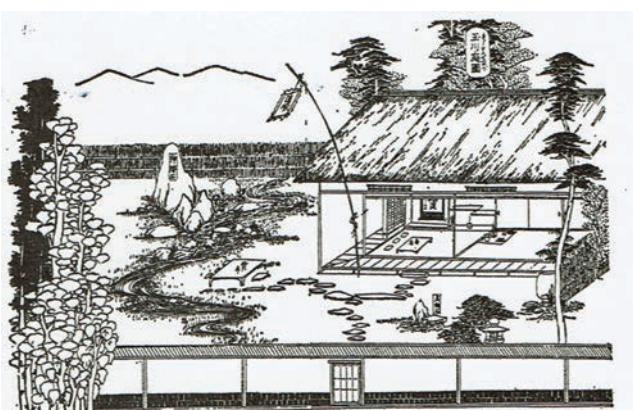


図3 「玉川庭図」（『築山庭造伝（後編）』）

### 降り井と流れ

煎茶の庭によく見られる「降り井」は、山中の岩石の間の湧水であり、洞窟の中を流れる清流などで、いずれも、岩間を通り抜け水をくみ上げるのである。上から釣瓶などを用い汲み上げるのではなく、かなり低い所に湧水があり、降りて水をくむものである。

古来、喫茶と水は、切つても切れない関係にある。水への関心、水へのこだわりから、近世・近代の煎茶「文人の庭」は、細かな意匠の部分を除けば、決して近世煎茶の世界が独占するものではない。

代表例として、頼山陽の居宅・西莊の離れとして「山紫水明処」が鴨川の河畔につくられた。鴨川越しに比叡山から連なる東山の山並みが望め、風通しの良いさわやかな空間であった。

開放的な建物と蛇行する細い流れの庭園である。その情景から、清水に惠まれた大自然を理想の環境とした煎茶の自然観が伝わるものである。高遊外売茶翁によって広められた煎茶が高揚期を迎えたことにより、「文人の煎茶の庭」が認知されたことによると思われる。

## 自然との一体感

自然との一体感をよしとする「煎茶の庭」は、特に空間をこうあるべしということではなく、茶を喫するに相応しい快適な空間があればよかつた。

宇宙の創造主の造作にまさる意匠

はなしと考え、自然との一体感をはかる。それはまさに道教的<sup>(註4)</sup>な生き方で、その限りにおいて、煎茶人たちは、喫茶のための新しい空間をつくろうという積極性より、まずは、自然の美を享受する場所「山林の面白き所、水石の清き所」に出向いて、「随所に茶を煮る」受け身の態度を自然なものとしてきた。

小川流煎茶第六世家元の小川後楽いわく、「興の趣くところ、いつでも心のままに茶を楽しむ」のが、煎茶の本質と語っている。いわゆる「隨所に茶を煮る」というのが煎茶の大きな特質と言つていい。

## 中国的意匠

中国的、文人的なものが煎茶の特質である。中国的な意匠は、喫茶空間や書斎、客間などの建築物にも取り入れられていた。本来の茶の湯の約束事にとらわれない、数寄の空間や庭園を煎茶的精神で自由に変えて

いつた。

## 「煎茶の精神と庭」を受講して

浅野  
廉裕



1978年、宮城県生まれ。高校卒業後、住宅メーカーを経て宮城県の造園会社に勤務。昨年、退職し今に至る。  
好きな庭…慣れ親しんだ生家の庭。好きな有名人…大谷翔平。尊敬する人物…宮城県支部の方々



和歌山県出身。京都造形芸術大学院（現京都芸術大学院）通信教育課程・環境デザイン・日本庭園修士課程修了。  
好きな庭…養翠園。尊敬する人…森岡毅

## 「自然との一体感」

板東  
美木

明治以降の近代庭園には、眺望のひらけた立地、開放的な空間構成、中国的な建築意匠、池にせり出した亭や降り井、竹、芭蕉、太湖石といった庭園素材など随所に煎茶的要素がみられる。

今日、煎茶的要素を感じられる空間は多くある中で、私が最も煎茶的と思うのは、幽邃の立地にたたずむ、中国的意匠の旧閑谷学校の茶亭「黄葉亭」（岡山県備前市）である。

【黄葉亭】（岡山県備前市）

の面白き所、水石の清き所」に出向

き、「随所に茶を煮る」受け身の態

度を自然なものとしてきた。

小川後楽『漱石と煎茶』平凡社 2017  
註1 小川後楽『漱石と煎茶』平凡社 2017  
註2 註1と同じ  
註3 不自然なことをせず、自然体でいることと  
する「無為自然」を理想とする。  
註4 道教とは多神教的宗教。無為自然である老莊思想、中国古代の民間信仰、不老長寿の神仙思想、陰陽五行説、易などさまざまな要素が集まつた中国の代表的な宗教。道教的とは、ほぼ老莊的な意味。

「煎茶の庭って何だろう？」講座の案内を読んで興味が湧いた。しかも、ズームでのオンライン講座だったので即、受講の申し込みをした。「煎茶」は明治時代から文人に広まっていったと思っていたので、平安時代の文献に「煎茶」の文字があること、王朝の雅や明治維新の革命に煎茶の精神が深く関わっていることを知り大変勉強になつた。

煎茶の精神が庭に求めるものは、自然との一体感であり、心のままに茶を楽しめる空間であること。「煎茶の庭は、約束事にとらわれない自由で優雅で自然の風を感じる庭のかな」と想像しながら講義を受け有意義な時間だつた。

連続基礎講座を受講するのは2回目になる。オンライン講座は、東京から遠方に住む私としてはとてもありがたい。実際に庭を見て体感できないのは残念だが、今後もオンライン開催を継続してほしいと思う。

煎茶の精神が庭に求めるものは、自然との一体感であり、心のままに茶を楽しめる空間であること。「煎茶の庭は、約束事にとらわれない自由で優雅で自然の風を感じる庭のかな」と想像しながら講義を受け有意義な時間だつた。

●参考文献  
・小川八重子『煎茶入門』婦人画報社 1971  
・諸泉祐正『小笠原流煎茶基本教書』小笠原流煎茶宗家 1972  
・『現代煎茶道辞典』主婦の友社 1978  
・小川後楽監修『煎茶入門』淡交社 2010  
・尼崎博正『七代目小川治兵衛』ミネルヴァ書房 2  
012  
・小川後楽『漱石と煎茶』平凡社 2017  
・尼崎博正ほか編著『庭と建築の煎茶文化』淡交社 2018

# 日本造園アカデミー会議主催 造園シンポジウム 「災い転じて希望となす」

2021(令和3)年9月11・12日 オンライン

造園アカデミー会議主催の造園シンポジウムは、昨年9月、2日間にわたってオンラインで開催された。

1日目は、東日本大震災の復興に力を注いだ（株）愛植物設計事務所の山本紀久会長と当協会の高橋康夫会長からそれぞれの取組み内容が報告され、続いて雲仙普賢岳の噴火により失われた雲仙の森の再生に尽力された雲仙百年の森づくりの宮本秀利会長による活動報告があつた。

2日目は現地視察。「東日本大震災復興記念庭園」を宮城県支部の横山英悦氏が、「雲仙天草国立公園 被災地・雲仙の森の再生」を宮本会長が映像を上映しながら解説をした。その後、尼崎博正氏（日本造園アカデミー会議議長）が「災害を乗り越える特別講演を行つた。

それぞれの活動報告から、災いから立ち上がる熱い思いと確かな造園力を学んだ。また、尼崎議長の特別講演からは、幾多の災いを乗り越えてきた庭園の秘められた強さと奥深さを感じることができた。

ここでは、当協会の高橋会長と横山氏の発表概要を紹介する。

## 一 東日本大震災からの復興

### （ボランティアによる復興記念庭園の施工に見る造園力）

高橋 康夫（会長）

#### 1. はじめに

早いもので 2011（平成23）年3月11日の東日本大震災からもう10年が経つ。今回、日本庭園協会がつくった東日本大震災復興記念庭園について発言をさせていただく機会をつくっていただき、非常にありがたい。

今日は私が概要を話し、明日は宮城県支部の横山英悦氏が具体的な設計の話や現地の解説をする。

#### 2. 宮城県支部の発足と築庭の経緯

大震災の影響により、東北支部は2年後に解散したが、「東北から日本庭園の灯を消したくない」という

の後、尼崎博正氏（日本造園アカデ

ミー会議議長）が「災害を乗り越え

てきた古庭園にみる造園力」と題す

る特別講演を行つた。

それぞれの活動報告から、災いから立ち上がる熱い思いと確かな造園力を学んだ。また、尼崎議長の特別講演からは、幾多の災いを乗り越えてきた庭園の秘められた強さと奥深さを感じることができた。

ここでは、当協会の高橋会長と横山氏の発表概要を紹介する。

5年の歳月を掛けて、宮城県支部

## 4. 築庭5年間の軌跡

築庭は、日本庭園の伝統的技術を伝える「伝統庭園技塾（以下、技塾）」として、全国から若手の庭師が参加できる仕組にした。2013（平成25）年から5年間、毎年5日間開催した。

復興記念庭園は、地元の寺院である臨済宗大義山覺照寺（宮城県黒川郡大和町）の協力を得て、その敷地内に築庭することとなつた。

#### 3. 庭園の思想

記念庭園の隠れたテーマは、池泉回遊式庭園の手法を取り入れて人の一生を表現していることである。それは、誕生（沢の水）→幼年期（第一の池）→壮年期（第二の池）→成熟期（第三の池）、その先には笠倉山があり、西方淨土に見立てることができる。魂はそこに帰っていくことができる。

100名の塾生が参加し、近所や赤十字安全奉仕団の方々には炊き出しをしていていただいた。3年目からは海外からも参加があり、国際的支援の広がりもあつた。

復興記念庭園は、2018年、当協会設立100周年の年に開園した。5月18日、覺照寺にて開園式を行つた。『東日本大震災復興記念庭園－覺照寺の庭 築庭の記録』の冊子を会員全員に配布した。

## 5. 復興記念庭園の完成

### ～復興に灯りをともす造園力～

この庭園の築庭において特筆すべきことは次の3点である。①延3,500人以上のボランティアの「無償の愛」で完成した庭園であること。②行政からの補助金を受けることなく、庭園協会の会員の3回にわたる寄付などで資金・資材を賄つたこと。③津波で流れ廃棄物として処分される運命にあった庭石などを庭園材料として再利用し、「庭の命」を再生したこと。



初期の計画図 2011.5月



変更後の計画図 2015.8月

て芸術的につくり上げる庭と、お金や人手が足りなくてもやむにやまれずにつくる庭があるということ。復興記念庭園はまさに後者に属する作庭で、そこに関わった人たちの、純粋に鎮魂と復興を願う気持ちが込められた庭園は、どの庭園よりも美しい輝きを放っていると思う。

特に、補助金を受けることをえてしなかつたのは、補助金を得てつくくなり、地元は下請けとなつて、いわゆる仕事としてつくる庭となつてしまふためである。それでは被害を受けた地元の「思い」が込められなくなり、地元の心からの叫びである真の意味での「鎮魂と復興の願い」が届かなくなるという宮城県支

部の強い思いがあつたのである。「お金でつくる庭ではなく、心でつくる庭」を目指したのである。

## 6. 最大の功労者

庭をつくるといつても技塾の開催は1年に5日間しかない。庭が完成するまでの5年間、ボランティア精神での見守り、技塾の準備から何もかも宮城県支部の働きがすべてであった。台風や集中豪雨の被害を受けた場所の復旧や、日々の雑草管理などがあつたからこそ完成することができたのである。

### 7. 終わりに～東北の復興と未来～

今年は復興記念庭園完成から4年

## 二 覚照寺（宮城県黒川郡）に施工した東日本大震災復興記念庭園

宮城県支部 横山 英悦

私は、庭園の構想から設計、施工時の技術統括、技塾での技術指導などに当初から関わってきた。本日は庭師の立場から、設計趣旨や完成した庭の様子を紹介する。

本日のテーマ「災い転じて希望となす造園力」は、正に私達のことである。震災から立ち上がり、復興記念庭園をつくり上げるという明日への希望を見つけたことで、災害を乗

目を迎える。山採りして植栽した樹木も活着して落ち着いた雰囲気になっている。イノシシが庭園を荒らすなど苦勞も絶えないが、地元の自治会や企業のボランティアに庭園管理に関わっていただくなど、地元に根付いた庭園になりつつある。多くの団体や近隣の方々が見学に訪れている。できる限りの案内や解説をして、築庭の主旨を説明し共感を得てもらっている。

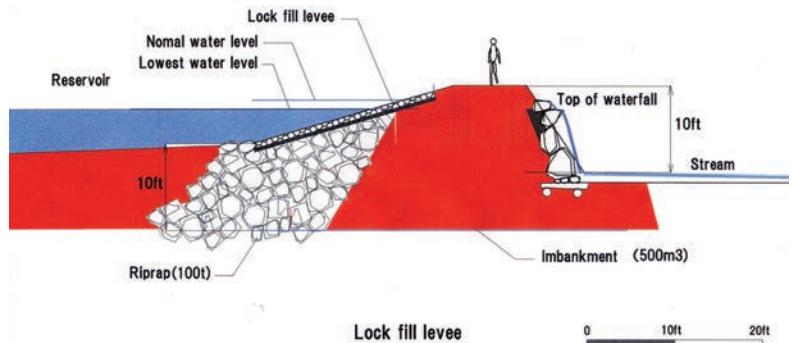
これからも東北の復興が一刻も早く進むことを祈念するとともに復興記念庭園築庭の思いを多くの方に伝え、100年後にはこの復興記念庭園が国指定名勝になることを希望するものである。

り越えることができた。

ことの始まりは、2011年2月、菊地正樹評議員（当時）に案内されて覚照寺の境内裏山に初めて入ったことからである。当時、技塾でつくつた庭はすぐに解体されるとが多かったが、ここなら庭は自由自在につくれ、永久に残せる、ということで、現況を把握した。西に見

観まで、全てが庭の借景として取り入れられそうだった。さっそく、庭の構想をはじめ、3月上旬には初期の平面図を仕上げた。

直後の3月11日、東日本大震災が発生した。大津波と原発事故で東北地方は壊滅的な被害を受け、計画が頓挫することが予想されたが、そのまま3ヶ月ほど掛けて、構想計画を作成した。



堰堤の断面図 2014.8

最初の構想は林に囲まれた谷間の庭であり、水面を広く取り、庭の維持管理（除草・清掃）をできるだけ軽減できるような地割にした。その後、池が予想以上に軟弱な地盤で、堰き止めても水が溜らないと判断し、穏やかな流れへと計画を変更した。休憩所から池の向こうの西方にある山並みを借景とした。

庭園の設計特性は、①発注者がいなため、思う存分庭を描き始めることができた。②設計から完成までの時間や整備に伴う工期の制約がなかった。③現況の地形を活かし、まわりの環境に庭を同化させることができ

は出さないが、いい庭をつくってもらえるなら自由に使ってくれても良い」と言つてくれた。

1.

次にそれぞれの工種を説明する。

2.

の研修時間を与え、納得するまで繰り返し挑戦してもらつた。



湯水時でも水鐘：壺空が胷る流れ 2021.7

堆積土の浚渫と搬出から始まり、

### 3. 貯水池の堰堤

板石を使い延段石を敷き並べた。目地幅は単調にならないよう仮並べをした後に据え付けた。

宮城県内で昔から屋敷の門から玄関までの通路に頻繁に使われていた稻井石を用いた。震災で不要となつてここに運ばれてきたのは幸運だとしか言いようがない。現在は入手困難な石材で希少価値が高い。

できた。(4)背景に優れた眺望があり、笹倉山を庭園に取り込めた。(5)境内には宮床伊達家累代の墓所がある。(6)既存の古いお堂に向かう参道を庭の回遊動線と併用できた。(7)山採り樹木を使い、周囲の環境に直ぐに馴染む植栽ができた。(8)被災した大量の庭石を再利用できた。(9)伝統的工法と現代工法を取り入れた施工技術の継承ができた。

この9項目は、通常の設計プロセスでは遭遇しない項目ばかりで、これが「災いを転じて希望となす」災害を乗り越え、夢を持ち続け誕生した復興記念庭園の神髄となつた。

延段は緩斜面なので、水平器を伸ばす、貫板を使い、踏み面を整えていき、熊野古道をイメージした素朴な石畳を目指した。樹木の根に石が持ち上げられてやや高くなつた所や、浸食作用で水の通り道になつてゐる所、常に人が歩いて踏みつけられて平らになつた所など、歴史を感じさせる演出をした。これらの手法は、施工の基本を超越したやり方なので、壘生達には難しかつたかもしないが、1人当たり1m<sup>2</sup>、3日間

この9項目は通常の設計プロセスでは遭遇しない項目ばかりで、これが「災いを転じて希望となす」災害を乗り越え、夢を持ち続け誕生した復興記念庭園の神髄となつた。

できた。④背景に優れた眺望があり、篠倉山を庭園に取り込めた。⑤境内には宮床伊達家累代の墓所がある。⑥既存の古いお堂に向かう参道を庭の回遊動線と併用できた。⑦山採り樹木を使い、周囲の環境に直ぐに馴染む植栽ができた。⑧被災した大量の庭石を再利用できた。⑨伝統的工法と現代工法を取り入れた施工技術の継承ができた。

1500m<sup>2</sup>の山林を新たに伐採し、造成した。

盛土造成用の粘性土は現場内で調達した。

堆積土の搬出と路盤改良に最も費用が掛かった。

クリートの躯体と比べ地震にも強く、数百年は持つと思う。栗石を池底から上に向かい丁寧に敷き並べた。石の天端は凹凸があつても良いが、底面は広い面を下に据えるよう指導した。このロックフィル形式の堰堤の施工方法は、長年にわたり法面内側の浸

食を防ぐことを狙つたもので、完成後計画高まで水を張つてみると、石の凹凸感がまわりの雰囲気に溶け込み、それなりの景観になつた。

4. 滘石組

貯水池の整備と並行して、滝石組を施工した。滝石組となる底部は元々軟弱な地盤であつたので、地盤沈下が予想された。前もって、堤体造成時に胴木を並べ、その上に碎石を敷き、転圧をして基礎部を締め固めておいた。この滝石組での課題は、集中豪雨が発生した際、濁流が全て貯水池に集まり、堰堤と滝石組を越水して下流へと流れてしまうことで、滝石組まわりの土砂の浸食を

6.

石橋

4. 滝石組

5. 流れ

滝石組が完成した日の夜に、台風が襲来。翌朝、三段に落ちる滝の水しぶきの様子を観察できた。予想通りの水の落ち方でほっとした。これを見た塾生達は「感激で体の震えが止まらなかつた」と後に話している。滝石組には大ぶりな鳥海石を

7.  
土壤

休憩所からみた景色づくりとして、中島に土橋を架けた。落葉期に境内の林で見つけた栗材を乾燥させ、手斧で削り、橋桁にした。横木丸太の上に杉皮を伏せ、その上にこねた粘土をたたき固め、苔留めとした。ここに来て初めて、手斧かけや土橋づくりをしたという塾生がほどんどであった。土橋は石橋や木橋と違ひ、見た目が柔らかく、年数が経つごとに素朴さが増してくる。樹木

9. 洞窟石組

ここに運び込まれた石の7割ほどが鳥海石（約500t）であつた。その中から天井の蓋（2m×2m）として使える石を見つけたことから、神秘性のある洞窟石組を思ひたつた。岩山が崩れて洞窟ができたら、ような石組を模索した。洞窟のまわりは山裾の土庄に負けない重量感のある岩組にした。部分的に強調したい所に思い切り大きな石を多く使つことで、庭全体に力強さを出した。

10 石積

土留の崩れ石積の法面上部にはシダを植栽し、林と庭園を繋げた。緩やかな法面に重厚感を出すため、伏

防ぐ構造にしなければならなかつた。耐久性のある強度が必要となるため、石の下地に栗石と粘土、裏込めには粘性土とセメントの混合土を

常真直ぐに架けるが、ここでは途中で動線を曲げ、次に進むようにした。滝を見た後、右に折れて、飛石を進むと笛倉山が正面に見える。

と土橋の影が水鏡になつて池の中に映り込むようにした。

## 8. 護岸

池の護岸は回遊しながら眺める  
と、刻々と変化するようにした。単  
調な護岸から複雑な石組へ、遠くの  
景色から足元の景色までと、様々な  
演出をした。中島の石組を引き立た  
せるために対岸の岸辺をあえて単調  
にしている。中島は回遊する園路の  
どの位置からも目に入るため、石の  
大きさと量を調整して据えた。

た。この水鉢の水源は上流の貯水池で、昔ながらの天然浄化システムでろ過した水を60m引いている。

水鉢は福島県出身の小泉隆一支部会員の作品で、福島産の白御影石を加工し、雲形の水鉢をつくって寄贈してくれた。水面に雲が映っているイメージでつくったという。



上り坂に打った飛石 2021.7

## 12. 飛石

ここに運ばれた川石(300t)

の中から比較的平らな石を選別し、飛石として用いた。飛石の打ち方は、大自然の中の庭なので、画一的手法はとらず、景七分渡り三分ぐらいの雰囲気で打つこととした。不揃いの石や踏み外し石なども取り入れ、自然観を出すようとした。

建築物の一部として積む休憩所の石積はスマート感のある野面石積とした。池の護岸は崩れ石積を取り入れた。どちらも、天端をそろえることで、スッキリと仕上げた。

石橋を渡り、笹倉山に向かう上り坂の飛石は、歩行速度を抑えるワイルドな打ち方とし、いろいろな表情を出した。

## 11. 鉢まわり

遠景と近景の程よいバランスと重厚さが必要である。雲形の水鉢と二段

## 13. 休憩所

庭園を構成する施設として、休憩所などの建物は美觀に深く関わる。

庭園整備の初期の段階から、私は、休憩所は笹倉山の山並みが見える所



歩行速度を抑えるワイルドな打ち方の飛石 2021.7

## 15. 石造品

寄贈された高さ1・8mの春日灯籠は、設置場所の雰囲気には高過ぎたので生込みにした。

このようにしてできた復興記念庭園の四季をみると、春は庭園入口でサクラがお客様を迎える。初夏には休憩所脇の法面に自生するミヤコワセメントを混ぜ、三層にたたき固めた。通常、土間の仕上げは、ムラをなくすため熟練した職人が行うが、塾生全員にたたきの体験をさせた。

この庭の植栽計画をするに当たり、覚照寺の住職から「境内に自生している樹木は必要なだけ使つても良い」という了解を得ていた。

ある日、「どうして、このような景色がつくれたのか」と当時のことを思い出しながら庭を散策している。「ひょっとしたら、この庭のお



春日灯籠を生込む 2018.5.15

施主さんは震災で犠牲になられた人達ではなかつたのか」と思つた。これらのことと、5年間汗を流してくれた方々の尊い思いを受け、私は生涯この庭を守ることを決意し、覚照寺に宗旨替えをした。この庭と共に生きる喜びを見つけたのである。

以上のように、宮城県支部がお借りしている覚照寺の裏山は、庭づくりの条件が全て整つている。全国どこを探しても、これほど庭づくりの環境に恵まれている所はない。この地域全体が「七ツ森」と呼ばれている。すでに私には「七ツ森」にちなんで、「七つの庭」庭園構想ができる。機会があつたら、隣接する森林庭園エリア、展望庭園エリアの整備もしたい。そして、将来はここを

最後に、5年間築庭に携わられた関係者と温かい支援を寄せていただきた皆様に感謝を申し上げる。この庭園が被災者と庭を愛する人々の心のよりどころとなることを願つてゐる。

### 竹田利光宮城県支部長の挨拶

復興記念庭園は5年かけて一応の完成となつたが、庭の管理はこの

先、数百年以上続いていく。現在、支部会員の他に、トヨタ自動車東日本や地元の宮床老人会の皆様には除草や清掃のボランティアに協力いただいている。月に一度の作業で庭は保たれているが、日々の管理が大事な庭のこと、もっと質を上げていきたい。管理以外にも作業道脇の石積やアプローチなど、本当の庭の完成はまだまだ先となる。

皆様には、是非ともこの庭に関わった多くの人の情熱や純粋な思いを体感してほしい。

図：横山英悦作図

写真：横山英悦撮影



早春の庭の水鏡 2019.3

## 「東日本大震災復興記念庭園」を地元婦人会100名が見学

昨年11月4日に、東日本大震災復興記念庭園を、宮城県富谷市、黒川郡の大和町・大郷町・大衡村の四つの地元婦人会会員が見学した。研修された婦人会の感想文を掲載する。

### 覚照寺での研修会開催

黒川郡連合会会長 浅野洋子

コロナ禍で延期していた研修会、当日は待つてましたとばかりの秋晴れの下での開催となりました。

覚照寺の境内に入るや否や、真っ赤に染まつたモミジが私たちを出迎えてくれました。

以前新聞で、覚照寺を若手庭師の技術研修場所とした日本庭園が完成したとの記事を目にしていたが、なかなか行く機会がなかつた。

今回、黒川郡の富谷市・大和町・



上空から見る散策中の様子 2021.11.4  
ササキシゲル氏撮影

廟と予てより訪れたいと思つていた「東日本大震災復興記念庭園」を見学することとしました。地元にはない本格的な庭園の見学、ワクワクした気持ちでの参加となりました。

写真等で見たことのあるようないろいろな石組や敷石、池の水面に映る木々の赤や黄色、紅葉のグラデーションはなんとも言われぬ美しさでした。庭を一周し終わり開けた眼前に現れた大森山（笹倉山）も雄大で、私達はなんて素晴らしい処に住んでいるのだろうと思いを新たにしました。

5年の歳月をかけ、震災で不要となつた石等も使つたとのこと、また、日本のみなならず外国からも塾生さんがいらしたとのこと、大変なご苦労をされて腕を磨かれたのだろうなと思いました。庭園見学での感激の余韻そのままに御廟見学、苔むした中に宮床伊達家の歴史を感じることができた一日となりました。研修が終わり会員からは、「何か京都に連れて来てもらつたようだね」との声もあり、みんな満足の研修会となりました。見学会に際し、いろいろとお世話を下さいました日本庭園協会の皆さまに深く感謝を申し上げます。有難うございました。

## 技術委員会主催講座の開催報告

### 現代の名工 卓越した技能者

● 「みんなの緑学 現代日本庭園の巨匠たち～その作庭手法と庭園観～第2回 齊藤勝雄」は、2021（令和3）年11月13日（土）に「緑と水の市民カレッジ」にて開催されました。コロナ禍に配慮し、人数制限（25名）しましたが、満員となる盛況でした。

最初に、齊藤勝雄氏と関わりの深い箱根植木株式会社の和田新也社長から、齊藤氏の略歴、人となり及び代表作品の紹介をいただきました。続いて、龍居竹之介名誉会長は、齊藤氏との交流からみた齊藤氏の人と仕事について語られました。

講座内容は、庭園協会ニュースに掲載予定です。

● 第12回庭園技術連続基礎講座の第1回は2021（令和3）年10月31日（日）、第2回は11月28日（日）にオンラインで開催されました。

第1回「煎茶精神と庭」の概要と参加者の感想は本号に掲載しました。第2回は、次号に掲載予定です。

### 開催予告

令和4年度全国支部長連絡協議会は、新潟県支部が幹事支部となり2022（令和4）年1月22日（土）にオンラインで開催予定です。

#### 厚生労働大臣表彰

令和3年度の現代の名工・卓越した技能者表彰が厚生労働省（以下、厚労省）より発表されました。当協会では、大平晶氏と越智将人氏が栄えある受賞に輝きました。

のとれた庭づくりの演出を得意とし、落ち着いた魅力ある空間造りを心がけている。  
また、検定委員等として技能検定の運営に貢献するとともに、後進を指導育成すべく、茨城県造園技能士会員・会長として、数多くの講習会の講師や技能五輪出場者等の技能指導に尽力している。

  
**大平晶氏（71歳）**  
茨城県支部役員  
株式会社大平造園土木

#### 技能功績の概要（厚労省発表より）

日本庭園築造の技術、技能の習得に努めながら50年以上にわたり第一線で活躍し、永年培った知識・技能・経験を有している。自然風な庭づくりの中で筑波石等の石組、石積を活用した滝組や流れなどと樹木の調和

  
**越智将人氏（63歳）**  
四国支部前支部長  
有限会社創造園

#### 技能功績の概要（厚労省発表より）

庭園設計能力に秀でており、特に、石積と版築土壙（はんちくどべい）（土や砂にセメントを混ぜ突き固めて造る土壙）の施工に卓越した技能を持つ。精緻を極めた石積、柔らかな表情を見せる



茨城県水戸市 N邸。滝から沢・池への水の流れ、イタヤカエデ・ナツハゼなどの紅葉が素晴らしい、心和ませる秋の景である。2015.11



広島県福山市 個人邸（木造平屋建）の中庭。見る方向により景色が変わるように設計し、全ての部屋から楽しめる。2021.5 小川重雄氏撮影

版築土壙、存在感を放つこれらを庭の一つの構成要素として巧みに配置することで、庭に自然美と調和をもたらしている。

また、日本造園組合連合会の講師として、全国各地で版築土壙や小庭の施工技術の伝承を行っている。

#### 編集後記

★巻頭言の執筆者、水本隆信氏は、「文化財庭園保存技術者協議会（平成14年設立）」の元代表です。本協議会は、文部科学大臣認定の団体で、文化財庭園を後世に保存継承するための技術を次世代を担う技術者に伝承し、後世に伝えていく活動を行っています。

★新年のご挨拶は、会長はじめ全国19支部の支部長ほかの方々です。新潟県支部の戸田由紀江さんは会員が営む会社に勤務するワーキングママ。伝統庭園技術塾などの講習会に熱心に参加され技術研鑽に取組んでいることから、小林紀昭支部長の推薦によりご挨拶をいたしました。

★造園技術連続基礎講座第1回目「煎茶精神と庭」の校閲は小沼康子が担当。

★造園シンポジウム「災い転じて希望となす」報告の取材・校閲は内田均が担当。

★令和3年度「現代の名工」を受賞された大平晶氏、越智将人氏に心よりお祝い申し上げます。

編集担当：小沼康子／内田均／鈴木貴博／中山なつ希／豊岡均  
本文デザイン：由比まゆみ